

厚生労働省がまとめた「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」には「地域における『新たな支え合い』を求めて」と題があり、住民相互の支え合いという概念で住民主体の地域福祉を主張しています(平成 20 年)。武蔵野市の第五期長期計画にも「市民一人ひとりの支え合いの気持ちを紡ぐとともに、自発的かつ主体的な地域福祉活動を推進し、福祉課題解決に取り組むことが重要」という一節があります(平成 24 年)。

どの地域においても活発な市民活動が報じられています。私はそういう活動にも関わらせていただいておりますが、福祉を本業にしていない方の発想やエネルギーには感服することがあります。埼玉県で活動する木原孝久氏(住民流福祉総合研究所)は「『ヒラ住民』の力を侮るな」といいます。「巨大世話焼きさんなどはプロが束になってもかなわない」とも(前出の報告書)。その「プロ」と名指しされる側で言えば、これからはそういう活力のある地域の方々と良いコミュニケーションのとれる主体であるかが問われます。

さて、そこでわが身はどうかと考えます。私は地域社会における(社福)武蔵野の役割の再構築と実践こそが重要な課題だと認識しています。もちろん法人の基盤である事業自体の充実・発展を期すことは第一ですが、それらと関連させながら地域で支援を必要とする様々な方々と向き合い、関係する皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと思えます。総じて言えば、福祉的な街づくりの一翼を担うべく、我々は非営利組織であることに立脚し、果たすべき社会的役割を自覚し、地域社会との間に信頼や好ましい関係をつくりながら目的を達成できるように努力していきたいということになります。

25 年前の広告に「時は流れない それは積み重なる」という惹句がありました。ウイスキー熟成の価値を謳っているのですが、私は思いを持って良い時間を積み重ねていきたいと念じています。

(平成 28 年 2 月)